

幻想明星伝(幻水Ⅱ ×T0V)

桃てん

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

※クロスオーバー※

暴走しているエアルクレーネがあるという情報に単身街を飛び出してしまったり、それを追ったフレンと共に姿を消してしまう。

2人の足取りを辿り後を追ったユーリたちだったが…。

幻水IIの世界にTOVキャラクターがトリップ。オリジナル展開並びにオリジナルの敵キャラが登場しますのでご注意ください。

目次

始まりは世間話。	1
動き始めた星々	5
光を纏う明星と異界への門	10
先行きの二星	19
対峙する狂皇子と馬小屋の救世主	31
運命の火蓋	47

始まりは世間話。

暴走しているエアルクレーネがあるらしい。

すぐ傍らから聞こえてきた数人の男達の世間話。しかしカロルは訝しげに視線を送ったのみであった。

リタと共に買い出し役として店の建ち並ぶ商店街にやってきていた。カロルは所謂荷物持ちで、商品は熱心にリタが選ぶ。

そこでさて、先ほどの男達の世間話である。リタの買い物中、暇で仕方がなかったカロルは既に購入済みのグミやらボトル類やらを両手に持ち、様々な店のある商店街をキョロキョロと見回していた。したがって視界に入ってきていたのである。話を始めるまでの男達の不審な行動が。

まず、男達はそれぞれバラバラにカロル達の付近にやってきた。何かを探すように辺りを見回して。特に知り合いという風でもなく、顔を付き合わせてもまず無言であった。それからだ、何かを各々が呟き一度こちらを（というよりは買い物中のリタを）チラリと見たあと、唐突にこう切り出したのだ。「暴走しているエアルクレーネがある」

と。

怪しすぎる。不審すぎる。何なんだ。

こと魔導器やエアル関連のこととなれば居ても立ってもいられなくなるリタを誘き寄せるつもりなのかもしれない、とカロルは警戒する。しかしどこかで、それでも相手はリタなのだから彼女自身、この男達が怪しいことくらい気付いて警戒するだろうと油断もしていた。

忘れてはならない。繰り返すようだがリタは自分の専門分野のこととなれば、居ても立ってもいられなくなるのだ。

「ちよつと何処なのよソレ！場所吐きなさい！だんまり決め込むと、どうなるか分かってんでしようねえ!？」

「ちよ、リターー！やめなつて…!」

もはや脅迫である。

恐らくリタの興味を惹くためにこの話題をあえて自分達の傍らでしたのである。男達は、とりあえず作戦成功だったのだろうがリタのこの凶悪な食いつきには心底怯えているようだった。

カロルは罠の可能性を案じている。よつて必死に止めようとするのだが、「ガキん

「ちよ邪魔！」とリタに振り払われてしまう。いよいよ彼は焦り始めた。

これは仲間を呼んで、止めてもらう他ないだろうか。そうカロールが思い辺りを見回した時だった。

「幸か不幸か、ちょうどその視界に居合わせた人物がいたのである。」

「フレーン!!」

カロールが大きく手を振って叫ぶと、遠くでも目を惹く、しかし決して主張をしすぎたはいない鎧姿がゆっくり振り返る。そうして少年の姿を見つけた鎧ことフレンはにこやかに軽く手を振り返す。

「どうも自分を見かけたカロールがただ元気に手を振ってくれているのだと思っただらしいフレンは、ある程度それに返すとまた歩を進めようとする。」

「いやいやいやいや。カロールは焦った。背後ではリタの罵声がより激しいものになっている。ここはもう躊躇つてなどいられなかった。」

「フレイエエエエン!!!助けてエエエ!!!」

「助けて、そう口にしてしまえば勿論フレンは気付いてくれるだろうが、怪しい男達まで警戒させてしまうんじゃないだろうか。というカロールの考えは当たっていた。」

「声に弾かれたのはフレンだけではなかった。彼がこちらへ駆け寄って来るのを確認すると、リタに胸ぐらを掴まれ揺すられていた男の一人が、どこにそんな力があつたの

かりタを強く振り払う。そうして他の男と領き合うと街の外へと逃走を始めた。

それを放っておかないのが研究者である。せっかく掴めそうであった情報を逃がしてたまるかとばかりに、カロールやフレンには目もくれずリタは男達を追い走り出してしまった。

「ああつ、リタ！危ないよ！」

「リタは僕が追うよ。カロールはユーリたちに知らせてくれないか」

「わ、わかった！」

領くカロールを見て「大丈夫」と笑いかけるとフレンはリタの後を追って街の外へと出ていった。

それを見送ると急いで仲間たちと滞在している宿を目指す。

皆各々に行動をしているため、全員がその場にいるとは限らない。

しかし、フレンがいるとはいえ何があるかわからないのである。より多くの仲間を連れていかねばと宿の戸を開けた。

動き始めた星々

相当のタイムロスだ。リタが今この場に居れば、そう言つてカロルの頭を小突いただらう。そうはならないのが、余計にカロルの足取りを重いものにしていた。

結論から言えば彼はリタがどこへ向かつたのか知らなかつたのである。

その時はどうにか騒動を止めようと必死で話など耳に入つていなかったのだし、そもそも確実な場所は逃げた男達にリタやフレンのように付いていかなければ分からなかつた。

まずはその場所について情報を集めるしかなかつたのだ。

幸いだつたのは、宿に仲間たちが皆集まつていたため人手が確保出来たことか。唯一鼻の利くラピードが外に出てリタたちの足取りを追つてくれてはいるが、如何せん様々な人間、魔物まで一日数えきれないほどの生物が横行する草原である。いくらラピードといえども難しいだろうが、とユーリは溜め息混じりに呟いていた。

結局数時間後、ちやうど男達とリタがやり合つている際傍を通つていて会話が聞こえたのだという街の住民からの情報提供と、うつつすらと残つていたリタとフレンの匂いを

察知したラピードの鼻の情報とを合わせ、目的地へと一行は足早に歩を進めていた。

カロールも遅れないよう必死に付いていくが、責任の念からか俯いたまま無言を通していった。

時間も時間であった。何事もなくリタがエアルクレーネを調査したのみであったなら、彼女らは今頃街へ帰ってきていてもおかしくはなかった。しかしラピードによれば、2人が帰ってきた匂いも形跡もないのだという。つまり、やはり、何かあったのだと。皆口には出さないが焦りを隠しきれないエステルなどは、進める歩幅が彼女らしくなく大きくなっていつている。

人一倍責任を感じているのが、他でもない、カロールなのである。

少年の後悔に屈んだ背中を抱き締める者はいない。からかう者も、責める者も。今が成長の途中なのだからと言わんばかりにユーリも、ラピードもちらりと目をやるだけで声をかけることはない。その様子に最後尾を担っていたレイヴンが、まるでお父さんね、と肩を竦めて笑った。

同じようにどこか優しげにカロールを見やったジュディスは少し足早になり前を歩くユーリに並ぶ。

「やっぱりバウルで向かった方が早かったんじゃないかしら？ 確実な場所もわからないわけだから」

「わからねえからこそだろ。住民の話によれば、最近唐突に姿を現した小さい祠だつて話だ。バウルで移動してりや見落とすかもしれないねえぜ」

「それにしても唐突に姿を現した祠とは、摩訶不思議なこともあるものじやの」
ラピードの横に寄り添うようにして歩くのはパティだ。くんくんと集中して鼻を動かすラピードの様子を見守りながら言う。

唐突に姿を現した小さい祠。住民の話では今までそのようなものはなかったのだという。しかしここ数ヶ月、しばらく見ないうちに、まるで昔からそこにあつたかのように自然と存在していたのだとのことであつた。

皆がにわかには信じがたい話ではあつたのだが、どうしても住民の表情が嘘をついているようには見えなかつたのだ。どちらにせよ手がかりが全くないわけなので、賭けてみた、といつても良いかもしれない。

ただただ目の前に広がる何の凹凸もない広い草原を一行は歩き続けた。

×××××
方。

白いローブに身を包んだ女性が空に瞬く星々を眺める。その表情は柔らかなものであったが、しかし徐々に悲壮なものへと変わりゆく。

ひとときわ大きく、輝きを増す星。その周りに無数の星々が集まっていく。

中心の、その大きな星を天魁星といい、そしてこの星の出現とは、多くの人々が命を散らす戦乱、天魁星を宿した者の過酷な運命を予見するものであった。

女性の姿を傍らで見守る少年は、その様子からまた争いが始まるのかと小さく溜め息をつく。そうして彼女へ近づくと、そろそろ休憩しませんか、と柔らかく声をかけた。

女性も、それに微笑みを浮かべ応ずると空の見える場所から室内へと入ろうとする。その時であった。

他のどの星とも輝きの違う、言わば異質な星が集まりを裂くようにして天魁星の周りを取り囲んだのだ。

これには女性も驚愕の色をその表情に浮かべ、戻ってお茶の準備をしようとしていた少年もただ空を見つめていた。

「レックナート様、あの星は…？」

レックナート、少年にそう呼ばれたローブの女性は首を左右に振る。しばらくの沈黙のあと、しかし、と静かに口を開いた。

「天魁星を守るもの…108の星々に力を添えるもの…起こりうる戦乱の火を共に鎮め

るもの：現れるのでしよう。この地に穏やかな光をもたらす明星たちが」

少年は訝しげに、しかししっかりとレックナートを見つめ耳を傾けていた。

輝く星たちは闇夜を晴らすかのように、その空が青く色を変えていつても光を失うことはなかった。

光を纏う明星と異界への門

辿り着いたのは話の通り、本当に小さな祠であった。その周りをくんくんと鼻をひくつかせ丹念に調べるラピードであつたが、やはりリタとフレンの匂いはこの祠で一切途切れているようである、と。つまりはまだ此処から出てきてはいないのだ。そう通訳するユーリの言葉にカロルは息を詰まらせた。

祠の入り口部分はラピードでこそ難なく通れはするが、パティやカロルほどになると少し窮屈に感じる。

ずっと地下へと長く階段が続いており、ユーリたちは各々身を屈めながら慎重に下りていく。

最後に腰が痛いだとなんだのと文句を言いながら屈んだレイヴンが入り口を潜り、階段を下り始める。そうして全員が、外からの光を受け付けない深部まで降り立つた頃。誰に知られることもなくその小さな入り口は外界を完全に遮り、音もなく消え去るのだった。

階段を下ったその先は、狭くはないものの足場の悪いごつごつとした岩で出来た通路であった。その中でもまだ安全であろう道をラピードを選び、それを先頭にユーリ、エステル、カロール、パティ、ジュデイス、レイヴンと続く。

外からの光が差し込むわけもなく、内部はそれは暗いものだったが、何故だかほんのりと足場が見える程度には明るくもあつた。

「単に目が慣れただけかの」

「そうなのかなあ……そうだとしても、何だか不思議な場所だね」

足元を見ながらパティとカロールが言う。そうね、とそれに同調しながらもジュデイスは警戒を怠らなかつた。確かにただ暗闇に目が慣れてきただけかもしれないというパティの考えの通りかもしれないが、それにしても不自然な明るさでもあつたのだ。どこかで何らかの力が使われているのかもしれないと、妙な不安を覚えていた。

それはレイヴンも同じようで、両腕を擦りながら周りに目を配る。

「ちよつとちよつと青年、これ何処まで続くのよ……。おっさんうすら寒いんだけどこの空気」

「きつともうすぐですよ、そこにリタもフレンもいるはずで……」

「ワンッ！ワンッ！」

レイヴンの声にエステルが穏やかに返している時であった。唐突にラピードが鋭く吠えたかと思えば一目散に駆け出してしまふ。慌ててその後を追うユーリと一行。

ラピードが向かったのは恐らく最深部であろう広い空間であった。周りは岩壁に囲まれ、中心には門のような形をしたオブジェが飾られており、外からの光ではなく何か宙に浮く球体のようなものがその場を明るく、幻想的に照らしていた。

その光景に見とれている間もなく、ラピードがオブジェの裏側あたりで再び吠える。それは言葉のわかるユーリでない者が聞いても緊迫した声色であった。

ユーリ、エステル、カロールがラピードのいる所へと回る。すると彼の足元には、おびただしい量の血痕が見てとれた。それにユーリはハツとした様子で近づき屈み込む。

「ワン……」

「やっぱりか……クソ、こっからどこ行きやがったんだアイツ……」

「ユーリどうしたんです？その血は、……まさか……！」

ユーリの表情が険しいものとなるのをエステルは見ていた。それに言い知れぬ不安と、頭の中にそうであつてほしくはない仮定が生まれる。

しかしその仮定は、覆しようのない現実となつてユーリの口から紡がれた。

「フレンのもんだ。……こんな怪我じゃ、まともに歩けもしねえだろうな。……、見ろよ」
力が抜け、座り込んでしまったエステルとぎゅっと服を握り締めて俯くカロール。それ

を痛ましげに見やり小さく舌打ちをしたレイヴンがユーリに近付く。

「どいよ」

「これだ。このオブジェみたいなものに掴みかかって、そんで…」

「途切れているわね。本人が自力で何処かへ向かったなら、血痕が続いていそうなものだけだ」

見るとオブジェの台座の辺りにユーリの言うように掴んだような血痕が残っていた。しかしそこから先、この空間内にはどこにもその痕が残っていない。もし回復術などで止血出来ていたとしても、あの足場の悪さである。出血量から見る怪我の程度では、歩くことすらままならないはずなのだ。

「誰かに運ばれたのかの。それならここから移動することも難しくはないはずなのじゃ」

「それだと、この祠からどこか違う場所にフレンちゃん匂いが続いているはずでしょ？それはワンコが確認済みで、こっから出てないって話だったんだから」

パティの言葉にレイヴンが腕を組み唸りながら返す。

ラピードの鼻が確かであればリタもフレンもここからは出ていない。それが大前提である。しかしこの空間に至るまで道は一本であり、暗いながらも他の通路はなかったようにユーリは確認していた。そもそも他の道があったならば、2人の匂いを辿ってい

るラピードが反応しないはずがないのだ。

一行に沈黙が訪れる。皆残された痕を見つめ、あるだけの可能性を引き出してこようと考へてはみるがどこかで否定をされてしまう。そうしているうちにラピードが小さく鳴き、ユーリの足元に擦り寄った。それに少しだけ表情を和らげると全員を見回してユーリが声をあげる。

「ここにこれ以上の手掛かりがないなら時間の無駄だ。とりあえず、もっかい入り口まで戻ってみようぜ。見落としがあるかもしれないねえしな」

重くなった空気を振り払うようにそう言って先頭をきつて歩き出す。それに皆顔をあげ、各々後へ続こうと足を踏み出す。エステルもどうにか立ち上がり、まだ傍らで俯いているカロルの背に優しく手を添えた。

「カロル、行きましよう？ここにじっとしていても、リタやフレンは見つかりませんか」

そう言って少しその背を押してもカロルは動こうとはしない。それにエステルは小さく息を吐いて、彼の両肩へ手を置きその顔を覗き込む。そうして言葉をかけようとした、そこで、エステルの表情はぎゅつと、悲しげに歪められた。

カロルはずっと泣いていたのだ。責任の念から泣くものかと我慢をしてきてはいたが、フレンのものだという血痕を目の当たりにして。自分が時間をかけたからだ、

もつと早く来ていれば、あのとギリタと共に話を聞いておけば、と。後悔しても何かが帰ってくるわけではない。しかしそれがわかっているからこそ、カロルは涙を止めることができなかった。

エステルは言葉につまり、ただ肩に置く手に力を少し込める。

そうすると微かに、カロルは視線をエステルにやる。そうして小さな声で言った。

「ボクのせいだ」

エステルはそれに首を振る。仕方がなかったことなのだと、その場で出来る最善を尽くした結果だと、そう返すがカロルは頷こうとはしない。

「ボクがしっかりしてなかったから、だから、リタとフレンは」

「それで？ 諦めんのか？」

いつの間に戻ってきていたのか、エステルの後にはユーリ、その後ろに仲間たちが控え、皆カロルを見つめていた。

ユーリの厳しさを含んだ声音に、しかし泣き腫らした目を隠すことなくゆつくり顔を上げたカロルは、ぶんぶんと左右に首を振った。そして今度はしっかりとユーリ、目の前で心配そうに見つめるエステル、ラピード、パティ、ジュデイス、レイヴンを順に見つめ返し強く言った。

「ボクはしっかりとやってない。今回みたいに……こうやって何かあればみんなに迷惑かけ

ちやうんだ。けど、…けどその分は、ボク自身で取り返したい！ボクのせいだから、自分が頑張つて、リタとフレンを助けたい！だから、だから、みんな…！」

握りしめた拳を震わせながら声を絞り出そうとするカロールに、最後まで言わせまいとするかのようにユーリがその頭にポン、と軽く手を置いた。言われなくてもそうする、と呟いた声は先程とは違い優しさを帯びたものになっている。それに目を瞬かせてカロールが見上げると、ユーリだけではない。仲間皆がその表情に笑みを浮かべていた。

「あなたに協力します、わたしたちは仲間ですから！」

「ギルドはひとりのために、ひとりにはギルドのために、でしょう？手を貸さないのは義に反するもの」

「のじゃー！今更改まつて何を言うかと思えば。仲間に遠慮はいらんのじゃ。」

「ワンツ！ウォオン！」

「なあによ、いっちよまえに宣言しちやつて。…らしくなつたじゃない？少年」

レイヴンに背を優しく叩かれ、皆の言葉に後押しされ、カロールの目からは再び涙が溢れだした。しかしそれをごしごしと擦すると、真っ赤に目を腫らして不格好ながらも晴れやかな笑顔を満面に浮かべた。

「みんな、みんなありがとう！絶対2人を助けようね！」

そういつもの調子に戻つたカロールが元気に言うと、ユーリがにと笑つて再び歩き出

そうと背を向ける。

先までとは空気の違う、絶望に満ちたような沈んだ雰囲気は何処にも見てとれなかった。あのリタだ、あのフレンド、絶対に無事なのだと言気持ちにも明るさを取り戻していた。

そうして、傍らに立つたエステルに再び手を添えられカロルは大きく頷く。今度は足踏みすることなくユーリたちの後を歩き始めた。

その時だった。

中心にあった門の形をしたオブジェがパツと光を放ち始める。それに驚いた最後尾のエステルとカロルが足を止め、先を歩いていたユーリたちも振り返り慌てて2人の元へと駆け寄る。そして各々が武器を手に戦闘態勢に入った。

すると光の中から霧のようなものが現れ、それが徐々に形を成していく。そうするうちに全ての霧は消え失せ、少しばかり柔らかくなった光の中から白いローブを羽織り、黒い髪を靡かせた女性の姿が現れた。しかしそれは光と共に儚くゆらゆらと揺れており、彼女自身は実体ではなくまるで幻影のようであった。

光に包まれた女性に殺意はない。こちらへ向ける気も敵のそれとは違う。そう感じ取ったユーリたちは構えていた武器を下ろす。それと同時にカロルが前へ進み出て女性へと声をあげた。

「リタとフレン…ボクの仲間が、どこにいるか知ってるの!？」

それは疑問形であるものの、確信しているに近い問いであった。ユーリは驚いたようにカロールを見やる。確かにここにずっと居たのであれば何らかの事情は知っているだろうが、そこではない。臆病なカロールが、何者かも確定出来ない相手に強く発言したことに驚愕していたのだ。

そんなカロールに女性は穏やかな表情を浮かべたまま、しかしどこか悲しげに口を開いた。その声は直接、頭の中へ響くかのようなようであった。

「ふたつの星…彼らはすでに戦乱の中心にいます。その身に光を取り戻した明星よ、世界を…人々を、救って下さい。あなた方は、108の星…天魁の星の元へ」

女性がそう言い終わると同時に床一面に見たこともない紋様が広がる。それらの周りに光が溢れだし、女性に言葉の真意を尋ねる間もないままにユーリたちの視界は見渡す限りの輝かしい白に奪われてしまった。

光の収まった空間に女性の姿はなく、そればかりではない。ユーリたち一行の姿も、影や形もなく、まるで初めから誰もいなかったかのように忽然と消え去っていたのだ。た。

先行きの二星

「さあ構えろ！精々俺を楽しませてみせるのだな!!」

いくら集中してみたところで、やはり言い表せないほどの気迫と殺気に圧され、内臓までもが潰されそうだった。だが臆することなく目の前の男を見据えるとフレンは剣を構える。慣れ親しんだ、手に馴染んだもの。

傷は癒えたもののやはり血が足りずまだ目眩がする。足元もふらつく。リタの普段聞き慣れないような悲鳴に近い声が聞こえる。それでも。

「僕たちを待つ仲間のために……負けるわけにはいかない!」

先に動いたのはどちらだったのだろう。

空気を裂くような風が2人の間を、それを見守る者たちの中を、リタの頬を撫せていく。

カンツ、という小気味の良い音を立て地に落ちた剣は、誰のものだったのか。

××××

フレンが牢で目覚めたのはほんの数分前のことである。

随分と体が軽かった。どうやらいつも着込んでいる鎧も、剣も盾も奪われてしまっているようだ。ゆっくり起き上がろうとし、腹部や頭部に鋭い痛みを覚える。よくよく見てみれば、簡易な処置はされているもののまだ巻かれた包帯には血が滲み、止血さえまともにされていない様であった。

それもそのはず。フレンはここに来るべき人間ではなかった。

あの祠で、リタをこの場所へ拐おうとする男たちと対峙した。しかし彼らは見たこともないような術を使い、更には化身と呼ばれる魔物のような生き物を大量に生み出したのだ。化身は倒しても再び復活をする。加えて男たちからも攻撃をされるため、フレンが倒れるのは目に見えた結果だった。

そのうちに動かなくなったフレンを死んだものと見誤ってくれたおかげで、男たちがリタを連れて光るオブジェに吸い込まれようとした際に残った力で何とかそれに追いつくことが出来たわけだが。

辿り着いた先で余計なものがかくつついてきていると男たちが知り、処理に困って今はとりあえず牢に入れられている状態か。フレンはここにいる人間にとって、知らなくて

も良いことを知ってしまった厄介者なのだ。近いうちに消してしまおうと、したがって傷の手当てなどは大して必要もないと、そういうことだろう。

この簡易な手当てでこそ、リタが進言してくれたおかげだろうが。と、そこまで考えてフレンは思考を停止する。

かつ、かつ、とこちらへ近付く足音がする。注意深くそちらを見れば、歩いて来るのは良く見知った顔だった。しかしその表情は彼女らしくなく酷く暗い。

「……リタ？」

思わず声をかける。するとリタは弾かれたように顔を上げ、こちらに走り寄ってきた。その勢いのままガシャンと牢の鉄格子に掴みかかる。

そうして驚くフレンには構わずその姿を上から下までまじまじと観察し、ぎゅつと眉を寄せた。

「なんなのよコレ！こんなの手当てのうちに入らないじゃない！あんたもあんたよ！何で付いてくるの!?!殺されかけといて、そんな怪我で、ほんと、バカっぽい……」

一気にまくし立てるリタの言葉を目を瞬かせて聞いていたフレンだったが、俯いてしまった肩が小刻みに震えているのに気付き小さく笑いを漏らす。それにリタが震える声で「何笑つてんのよ」と返すと、フレンは少々思案した後はその下を向く頭に軽く手を乗せた。よく親友が小さな子供にしていたような、この少女にしてしまえば激怒され

かねないため、どこかぎこちなさは残るものの。

案の定、力なくではあるが「子ども扱いたくないで」とリタに言われてしまう。しかしフレンは止めることなく優しくぼんぼんと撫でてやる。

「ありがとう。心配してくれているんだね」

「…別に。あたしが勝手に行動して、巻き込んだんだから、それで…」

「僕が勝手に巻き込まれたんだ。それに、あの祠でもう少し僕に力があれば、止めることだって出来たはずだった。すまない、及ばなくて」

フレンの言葉にぶんぶんと首を左右に振るリタ。そうしてごしごしと目元を服の袖で擦ると、ゆっくり顔を上げた。その表情は先ほどと同じく酷く暗いものであった。何か伝えなければならぬことがあるが、どう言葉にして良いのかわからない。そういった様子で口ごもる。

フレンには大体の予想がついていた。おそらく自身の処遇だろうと。この様子からするとあまり良くない決断がなされたのだろうと肩を竦める。

そうであるならば、早急にとりあえず装備の在所だけでも突き止めなければなるまいとため息をついた。

「あまり、脱獄は得意じゃないんだけど」

ぼつりと呟いたフレンの言葉にリタがぎよつとする。まさかこの真面目が服を着て

歩いているような生き物から「脱獄」などというワードが出てくるとは思わなかったのだ。しかしよくよく考えてみればあのユーリの親友と自他とも認める男である。そう思い直してみれば、何も躊躇うことなどなかったのだと。リタは吹っ切れたように自身の両頬をぱんぱんと叩いた。

「あんたがその気なら助かったわ。法に反することはしたくないーなんて言われたらどうしようかと思つてたから」

「したくはないよ。何も罪を犯してはいないが、牢に入れられた時点でそれを破つて脱するということ自体が罪とみなされるから、本来は裁判をした上で無実を……」

「あーもうわかつたから！ あんまり時間がないの。あんたの装備のある場所は確認してらわ。そうね、まず……」

そう言つてキョロキョロと辺りを見回していたリタだったが痺れを切らしたように頭をわしやわしやと搔くと、普段そうしているように魔術の詠唱を始めた。

フレンはそれに慌てて回避出来る場所を探す。狭い牢屋である。当たるか当たらないかの距離しかないが、もう隅に寄る他なかった。脱獄とはもう少し静かにやるものではなかっただろうか、これでは逃げます！ と主張しているようなものではないのか。そうこうしている内に詠唱を完了させたリタは、頭の中で大いに混乱しているフレンには目もくれず、

「時間がないつつつてんでしょ！ファイアーボール!!」

しかしきつちり口にしていない問いに答えてくれた。

ドオオン！と案の定けたたましい音を響かせて鉄格子が吹き飛び大きな穴が開く。星喰みを消すため、戦いを重ね力をつけてきたリタの魔術である。ファイアーボールだからと侮るなかれ、だ。

命の危機をこれまでになく感じていたフレンも何とか無事である。鉄格子側に向けていた耳がキーンとしてやや聞き取りづらいような気はするが大した問題ではない。痛む傷を気にしないようにしながら、素早く立ち上がる。そうして鉄格子に開いた穴から抜け出すと、すでにリタは牢獄から廊下へ続く階段の上にあった。

未だ誰もここへ来る気配がない。なんとたる警備の薄さだろう、と騎士団所属の身としては少し心配になる。階段を駆け上がると、リタが外の様子を伺いながら言った。

「あたしたちが今居るのは、皇都ルルノイエの中にあるブライト王家の宮殿。ここ、ハイランドって国を統治してる王族らしいわ」

「宮殿？そのわりには警備が薄いな」

「今は公開訓練中なのよ。皇子が直接軍隊率いてるつてんで、王様も見に行ってるみたいね。つまりそっちに警備重視させ過ぎてんのよ」

「……………詳しいね」

次々に出てくる内部情報にフレンが感心したように言えばリタはにんまりと笑みを浮かべる。他国から招待された研究者だと話せば皆全面的に信賴し、何でも教えてくれたそうだ。

フレンはリタに付いていきながら、宮殿内の様子も觀察する。リタに対する兵士の態度といい、雰囲気といい、人を拐つてこなければならぬ物騒な事情がある国だとは思えなかった。では一部で何かしらの企みが行われているのだろうか、と思索したところでリタに手招きをされる。

周りを見回し誰もいないことを確認するとリタの入つていった部屋へと素早く入室する。すると直ぐ様リタが扉を閉めて鍵もきっちり掛けた。

この部屋はどうやら倉庫のようで、あまり掃除もされておらずホコリっぽい。フレンがあからさまに顔をしかめつつ見て回ると、見覚えのありすぎる自身の鎧や劍など装備一式が無造作に放置されていた。

リタが扉に寄り添うようにして警戒をしてくれている間に格好を整える。肩に重みがのし掛かり、傷にダメージを与えているのがありありと分かったが、どうしてか先程よりも精神が落ち着いていた。

リタのいる扉まで戻ると、人差し指を口許に当ててこちらを振り返る。どうやらようやく脱獄に気付いたらしい兵士たちが、牢屋の惨状を見て慌てて搜索にあたっているよ

うであつた。

「そういえば、リタは自由に城内を歩き回っていたんだね」

兵士たちの横行が一段落するまで身を潜めようと倉庫で状況を伺っている中、思い出したようにフレンが尋ねる。それにリタは呆れたように溜め息をつくど、ほんと今更ね、と呟いてから話し出した。

「城内でくらい自由にさせなきゃ協力しないって言つてやつたのよ。あたしが拐われた理由は、この国が新しく開発する兵器を量産するためだった。まあ、それはあたしくらいの頭脳がなきゃ不可能なことだから？条件出したら簡単に呑んでくれたわよ。…あなたの処遇以外はね」

「さすがアスピオの天才魔導士だ。…いや、ちよつと待つてくれ」

にこやかにリタの話を聞いていたフレンだったが、ふとした疑問を感じ視線を扉からリタへと向ける。

「僕はハイランドという地名も、ブライトという王族の名前も聞いたことがない。ここは、テルカ・リュミレースの一部じゃ…」

「ないわ。非科学的なことはあたしも信じたくはないけど、異世界よ。あんたが寝てる時書庫へも行ったけど、知らない本に知らない文字ばかりだった。話をする分には、言葉は通じるみたいだけど。」

異世界。そう言われても実感が湧かないのが事実である。幼い頃にユーリと共に読んで憧れていたどこか遠い国のすごい英雄の話。しかしそれはいわゆるファンタジーで、自分たちの住む世界とは違う、作り物の世界の話なのだと言われた。そう信じ、存在しないのが真実なのだと言われた。

しかし異世界というものが本当に存在していたというのか。確かにあの祠で男たちが使った術も、生み出した魔物も、オブジェから発せられた光に包まれた感覚も、今までに経験した何とも違っていた。

「…本当に異世界だとして。それならここにもエアルが存在しているのかい？君がさっき魔術を使ったのも、ここで開発している兵器というのもリタが呼ばれるくらいだ、おそらく魔導器だろうけど、エアルが無ければ使い道は…」

「ここにエアルはない。けど…あたしもあんなも、今まで通り魔導器を使える。この理由はわからないの。兵器に関しては確かに魔導器だったわ。詳しくは見えていないけど、エアルでは動いていなかったと思う。何か他の方法で…」

「僕たちの世界から異世界に兵器として魔導器が持ち込まれたということか」

これは由々しき事態である、とフレンは拳を強く握る。この世界がテルカ・リュミレースとまるで違うというのであれば、今まで魔導器という存在には触れてこなかったわけで、そもそもそのようなものが存在していることすら知らないのだ。

今、ユーリたちと自分はその魔導器を動かすための魔核を精霊に変換し、要は魔導器をなくすことで今の理を改変し星喰みという災厄から世界を救うために戦っている。

エアルの存在しないこの世界では星喰みの驚異はないのかもしれないが、今後どのような弊害が出てくるかわからない。それが自分たちの世界から知らず知らずに持ち込まれたもののせいだとすれば、居たたまれなかった。

「きつと、あたしを連れてくるよう命じたやつが黒幕よ。そいつがテルカ・リュミレースの人間で、この世界への入り口を見つけたことで魔導器を持ち込んで、新兵器だとか言って売り込んでバカ儲けしようとしてんでしょ。くだらないわ…魔導器が可哀想よ」
どちらにしろ、今は抜け出してユーリたちの元へ戻るのが先決である。とりたは再び

意識を扉の向こうへ集中させる。調査したいのは山々だが、こちらには地の利もない、見知らぬ場所である。皆と合流してから安全に進めても問題はないだろうと、カロルの制止を振り切り街を単身で出ていってしまった人物と同一だとは到底思えない発言をするリタに、フレンは思わず噴き出してしまう。

それにむつとしながらも小さく「これでも反省してんのよ」と呟いたリタは、それにフレンが何か言葉を返す前に鍵を外し扉の隙間を開けて廊下の様子を見る。そして誰もいないことを確認すると完全に扉を開ききった。リタの後に続いてフレンも外へ出る。

「まず裏に回るわよ。そこに馬がいたから拝借しましよ。それでそいつに乗って門を突つ切る。いい？」

「…脱獄の次は窃盗か…」

憂鬱そうに呟くフレンをリタがギツと睨む。それを笑顔で受け流し、先を急ごうと促す。何かを言いたげにしばらく睨んでいたが鼻をふんつと鳴らしずんずんと進みだしたりリタの後を、敵との遭遇を警戒しつつ付いていく。この先はフレンも武器を持つているため戦闘になっても問題はないのだが、出来る限りそれは避けたいと考えていた。おそらく公開訓練に行っているという警備の兵士たちにも連絡は入っているはずなのである。訓練自体はそう遠くで行っているわけではないだろうから、増援が来るのも時間の問題だった。

リタが事前に歩き回り経路を確認しておいてくれたおかげでスムーズに広大な宮殿内を目的の地へ向けて進むことができていた。途中、何度か兵士に遭遇したが騒ぐ前にフレンに鞆を着けたままの剣で殴り倒されていた。処置不足だった傷も、途中魔導器が返ってきたことで定期的にキュアを重ねがけしており、大分痛みもなくなっていた。しかし流れてしまった血が戻るわけではないため、足元が覚束なくなってくるが頬を強く張って意識を戻す。その様子にリタは表情を険しくするが、本人が先を促すため歩みを止めることはない。

そうして、馬小屋のある裏口から宮殿の外へ出た時であった。ガチャガチャと鎧同士がぶつかり合う金属音が四方から聞こえたかと思うと、待ち伏せをされていたのだろう。剣や弓を構えた兵士たちが50人は越えているだろうか。リタたちを取り囲むように陣形を組んでいた。

「見逃してもらえそうにないわね……いける?」

「やってみせるさ。ここに留まるわけにはいかないんだ」

2人は背中合わせに兵士たちと対峙する。どれくらいそうしていただろう、長い沈黙の後フレンの正面にいた隊長らしき兵士が痺れを切らして手を高々と上げる。そしてそれを勢いよく振り下ろし号令を下した瞬間を合図に戦闘の幕が切って落とされた。

対峙する狂皇子と馬小屋の救世主

「秋沙雨！つさせるか、魔神、連牙斬ッ！」

自身を囲む兵士たちを連撃で伏し、続けざまに振るった剣から斬撃が詠唱を続けるリタを狙うため弓をつがえる兵士に向けていくつも放たれる。それを避ける間もなく弓兵たちが倒れると、息をつかせる間もなくリタの詠唱が完了した。

「これで終わりよ！タイダルウェイブ!!」

リタたちを取り囲む陣形をそのまま襲う形で流水が激しく渦を巻く。そうして容赦のない魔術が消え去った後には、あれだけいた兵士たちが残らず倒れ伏すというまさに地獄絵図が完成していたのだった。

「ふんっ、よく相手を知りもしないで楯突くからこんな目に合うのよ！」

あたしに勝とうなんざ百年早いわ、と倒れた兵士たちを見下し大袈裟に笑うリタの姿はもはや誰が悪者なのかわからなくなるといふ錯覚現象をフレンの脳内に引き起こしていた。それを振り払うかのようにぶんぶんと首を振り、兵士たちが目覚めないうちに馬小屋から一番丈夫そうな馬を拝借する。よく鍛えられている体躯に、大切にされて

いる馬なのだろうと罪悪感が押し寄せた。首を優しく撫でてやり、協力してくれるかと問えば馬は小さく鼻を鳴らし顔をフレンに擦り寄せた。

「リタ！この馬が乗せてくれるみたいだ。増援が来ないとも限らない、早く……」

未だ兵士たちの傍で気分良さげに佇むリタに顔を向け、声をかけたまさにその瞬間であつた。

今まで何故気配を感じることが出来なかつたのかというほど、すぐ背後。伸ばされた剣先が首に突きつけられて初めてそこに敵が迫つていたのでと気付いた自分の失態にフレンは彼らしくなく舌打ちをする。そうして気付いてから唐突に感じ始めた、恐ろしいほどの殺気、闘気、これまでに向き合つたことのない圧倒される気迫。表に見せないよう隠しているつもりではあるが、剣を握つた手が恐怖に震えていた。

「……背後から気配を消して近寄るなんて、少し卑怯じゃないのかい？」

「フハハハ！人の馬を堂々と盗もうとしていた脱獄囚に、まさか卑怯者呼ばわりされるとはな」

フレンは言葉に詰まる。確かにその通りである。何も言い返せない。言い返せないが、この状況は何とかなければならない。リタを見ると彼女も足は見るからに恐怖に震えていた。しかしその目はきつくフレンの背後にいる敵を見据えており、決して諦めてはいない。ただそのリタの背後も、再び新たな兵士らが退路を断つため取り囲みつつ

あつた。

一步でも動けば真つ二つにされてしまいそんな背後の殺気に、どうするかと中々回らない頭で考えを巡らせていると、その当の敵から痺れを切らしたのか話を進め始めた。

「フン、向こうのガキはそもそもハイランドが迎え入れた研究者だ。生かしておけば役に立つ。が、貴様は違う。本日中には処刑される予定の囚人だ。いいだろうこの際、有り難く思うがいい！」

そう高らかに言い放つと同時に首元から剣が退かれる。それに弾かれたようにフレンはリタの元に駆け寄り、改めて敵と正面から対峙した。

白銀のシンプルながらに高貴な鎧、業物だろう刃こぼれひとつ無い美しい剣、そして深く狂気を宿した瞳。ぞくりと背に悪寒が走る。これは武者震いだと自身に言い聞かせるものの、どうしようもない恐怖が全身にまで巡った。見失わないよう、ぐつと強く剣を握る。

「今こゝで、俺が直々に手を下してやろう！名譽なことだ、このハイランド皇子、ルカ・ブライトが手を汚してやるのだからな！フハハハハハハハ!!」

ハイランド皇子。後ろでリタが息をのむ。この狂おしいほどの憎悪に満ちた目をした男が王座に就くべく産まれた皇子だというのか、とフレンは表情を強張らせる。何が彼をこうしてしまったのかはわからない、いつからなのか、幼い時分からなのか。本当

の彼までもが憎悪に隠されてしまっているのか、そうではないのか。一件平和で穏やかな日々が流れていると思われたハイランドという国の抱えた闇が、この皇子の背に全てのし掛かっているのかもしれない。フレンは長く息を吐く。そうして手の震えを止めた。いくら敵が強大であろうと、成さなければならぬことがあるのだ。

「それは…有り難いな。けど、黙ってやられるつもりはないよ」

「あんた…か、勝てる、の…?」

背後からリタの控えめな問いかけが聞こえる。正直に言えば自信はなかった。しかし自身に言い聞かせるように「勝たないといけないんだ」と強く返す。それにリタはぐつと言葉を詰まらせ、小さく頷いた。

そのやり取りを聞いていたルカが豪快に肩を揺らして笑うと、他の兵士たちより一歩前に進み出る。そしてフレンへ剣を向けて言った。

「俺と勝負しろ。貴様が勝てばそのガキ共々見逃してやろう。貴様が負ければ、刑が予定通り執行される。ただ、それだけだな。」

フレンも一歩前へ進みだし、胸の前で祈るように剣を掲げてからその刃先をルカへと向ける。

「わかった。その約束を必ず守ると言うのなら、僕も全力で抗おう」

フレンのその言葉を聞いたルカは「俺は約束は違えん」とはつきり言いきった後に先

程までよりも殺気を色濃く滲ませ、ゆつくりと剣を構える。それにフレンは恐怖からか受け止めるだけで息が上がりそうになる。しかし呼吸を落ち着け、ルカの剣先をしつかりと目に映すことで集中を保とうと意識を一点から外さない。

「さあ構えろ！ 精々俺を楽しませてみせるのだな!!」

いくら集中してみたところで、やはり言い表せないほどの気迫と殺気に圧され、内臓までもが潰されそうだった。だが臆することなく目の前の男を見据えるとフレンは剣を構える。慣れ親しんだ、手に馴染んだもの。

傷は癒えたもののやはり血が足りずまだ目眩がする。足元もふらつく。リタの普段聞き慣れないような悲鳴に近い声が聞こえる。それでも。

「僕たちを待つ仲間のために…負けるわけにはいかない!」

先に動いたのはフレンだった。コンマの差でルカも間合いを詰める。ぎりぎりまで相手を引き付け、大ダメージとはいかないだろうが、持てる全ての気を叩き込む技を繰り出す。

「獅子戦吼ッ!」

「ぐっ…」

至近距離からの攻撃にルカは吹き飛びはしないものの、受け止めた剣圧に押されて後退する。その隙に足に力を入れ跳躍したフレンは宙で構えを整えた。

「当たってくれ…飛天翔駆！」

勢いをつけ眼下のルカ目掛け急降下する。これ程の力量の男である。避けられてしまう可能性もあつた。

しかしフレンは、剣がルカを捉えようとする一瞬に気付いてしまった。彼が敢えて攻撃を受けようとしており、その顔に恐ろしいまでの勝ち誇った笑みを浮かべているのを。

何か策があるのだろうか。しまった、と思ったが身を翻す暇もない。無理矢理に身体の重心をずらし直前で軌道を外す。ルカの鎧を掠り着地したそのままの流れで剣を振り上げようとし、目を見開く。

違ったのだと。

これこそが狙いだったのだ。

ルカの攻撃範囲に、技を外した一瞬にどうしても出来る無防備な状態で侵入してしまう。避けてしまえばまた間合いを詰めなければならぬ上に敵に体勢を立て直されてしまうが、至近距離で自主的に外させてしまえば。

現にルカはもう。

「きゃああああー！」

リタの悲鳴が響き渡る。

身体の、肉の焼ける臭いか、血の焦げ付く臭いだろうか。

炎を帯びたルカの剣に背から貫かれ、深く刃で切り裂かれながらその状態のまま力任せに地へと放られた。叩きつけられた衝撃で手からは盾も剣も離れ飛ばされる。

カンツと小気味の良い音をたて、剣がリタの足元へと転がった。

倒れて、しかし立ち上がるとうとするものの力の入らないフレンの元へリタが駆け寄ろうとするがそれは背後から突きつけられた兵士の剣によって阻まれる。

それに代わり、その顔に実につまらないといった心情をありありと滲ませているルカが足元へと立つ。まだ終わってはいないと、身体を起こそうと懸命に腕に力を入れるフレンの腹部に、躊躇いなくルカの剣が振り下ろされる。

「つぐ、ああ……！」

「フン……大口を叩いておいて所詮この程度か。つまらん。命乞いをするしか芸の無いブタ共を刻むのにも飽きていたところだ、期待していたが……」

とんだ見かけ倒しだったようだ、と嘲るように吐き捨てる。そうして突き立てていた剣を抜き去ると、さして興味もないといった表情のまま、大きくそれを振り上げた。

「無様なものよ……傷も痛むだろう。すぐに楽にしてくれる」

勢いよく振り下ろされる。

何故だかそれがフレンにはゆっくりと、徐々に迫ってくるように見えた。ぼんやりと

しか聞こえはしないが、リタが何事かを叫んでいる。

このまま終わってしまうのか。生まれた場所ではなく、どことも知らぬ、異界の地で。自分がいなくなれば、再建半ばの騎士団はどうなってしまうのだろうか。部下たちは支えて行くべきヨーデルは。仲間は、ユーリは。

無意識に詠唱を口走る。まだ終わるわけにはいかなかった。待っている仲間がいる、そのために負けるわけにはいかないと言ったではないか。

血が通わず、抜けていた力を無理に入れる。最後の反撃かもしれない、この一撃で力を倒せるとは思わない。

それでも良かった。それでも、終わる気はなかった。終われるはずがなかった。

「ブタは死ねエエー！」

狂気に満ちた目を見上げる。もうゆっくりと動いてはいない、時間を取り戻した視界で。

剣先が自分の心臓に迫る、それと同時に術式を展開する。そして、

「終わらせない……！ デイバイン、ストリーク！」

「な、にイ……っ」

ルカの剣が速いか、術の発動か。しかし照射される光に圧された次の瞬間にはルカの身体は宙を舞っていた。目立つ傷も付けられていなかった鎧に、焼け焦げた痕を残し

て。

地に叩きつけられ咳き込みながらもルカはすぐ片膝を立て身体を起こす。その間にフレンも距離を取りながら、何とか立ち上がっていた。しかし武器を取るため足を動かすことも、再び剣を握ったとして技を繰り出すことも出来る状態ではないと誰が見てもわかる有り様だった。

「無駄なこととを……まだ生に縋りつくか」

ルカの言葉にフレンはその顔をきつく睨む。縋る他ないんだ、と小さく呟くと肩を大きく上下させ苦しげに繰り返していた呼吸も正さずそのままに、叩き付けるように叫んだ。

「僕にはまだ！やるべきことがある!!こんなところで、死んでいる暇はない!!」

その言葉が終わるが早いかルカが剣を構え凄まじい勢いで迫り来る。対するフレンも気力を振り絞り術を発動させようと詠唱を開始した。耐えかねたりタが突きつけられた剣を振り払い、背を狙う刃を気に留めずフレンの元へ走り出そうとする。

その時だった。

「よく言った若人よ。感動ついでに、おっさん助太刀しちやおうかね」

空気に合わぬ茶化したような声。同時に、周りを囲む兵士たちとルカを目掛け空から大量の矢が降り注いだ。

それを避ける暇もなく陣形を崩しながらバタバタと倒れていくバリケードの兵士たちと、防戦のためフレンから距離をとるルカ。弓を弾きながら忌々しげに、リタの背後にあるもうひとつの馬小屋、その屋根を睨み付ける彼の視線の先にいたのは。

「はあ!?!おっ、おっさん!?!」

「レイ、ヴンさん!?!どうしてここに!?!」

見慣れた紫色の服、ボサボサの結わえられた髪。いつの間にか誰にも気付かれることなくそこにいたレイヴンは絶えず弓に矢をつがえて集中的にルカへ放ち、またその周りの兵士たちへも攻撃を加えながら、驚くりタやフレンに余裕たつぷりにウインクを飛ばして見せる。

それが合図だった。驚きから呆然としていたリタは、レイヴンのウインクではつと我に返る。混乱する兵士たちの中、素早く詠唱を完了させると経路確保のため道を塞ぐ敵の殲滅にかかった。

「そこ、どきなさい!メテオスウォーム!!」

リタの呼び掛けに答え、空から降り注いだ大量の星に逃げ惑う兵士。その隙をついて、レイヴンがいる背後とは逆、向かい側の馬小屋まで走った。フレンが拝借しようとして入り口まで引つ張り出していたおそらくルカのものであろう馬に駆け寄る。これだけ鍛え上げられた馬ならば長距離を走らせても大丈夫だろうと手綱を引き飛び乗ろうと

する背後。

レイヴンの矢を難なく弾きながら、リタの姿を確認し一気に距離を詰めるルカが。しかし。

「ホーリイランス！」

そのルカの足元に無数の光の槍が突き刺さる。剣を再び手にしたフレンが発動したものだ。忌々しげに睨むルカの視線を一身に受け、動かすのも億劫な足を気合いで一歩踏み出す。

「まだ、倒れていないよ」

「小賢しい……死に損ないがアア！」

怒りを露に斬りかかるルカの重い一撃一撃を剣で受け止めるだけでも精一杯である。膝から崩れそうになる。しかし勝負を放棄するつもりのないフレンはそれでも懸命に耐え、反撃の隙を伺う。

そのうちにあらかた周りの兵士を掃討したレイヴンが駆けつける増援の足音を聞き付ける。これだけの騒ぎを起こしているのだ、倍以上の兵士たちが雪崩れ込む可能性も十分にあり得る。

馬小屋の屋根から飛び降り大声でリタに叫んだ。

「リタっち時間切れ！敵の少ない今のうちに逃げるわよ！」

「大丈夫！なんとかこの子も言うこと聞いてくれそう……おっさん早くアイツをー！」

リタの言葉に頷くとレイヴンは自身が今まで屋根にいた馬小屋から適当な馬を引張り出し跨がる。そうしてルカと剣を交わすフレンの元へ走る。

フレンの背後、至近距離からルカに向かい矢の束を放つ。それを後ろへ飛ぶことで回避したルカの隙について驚くフレンを素早く多少無理に抱えた。

「いつ……いれ、レイヴンさん！まだ勝負がついていないし、約束も……」

「生きてりやいつかまた再戦できんでしょうが！とりあえず今回とこはこれにて退散よ！リタっち頼むわ」

自身の馬を横付けするとレイヴンは抱えたままだったフレンをリタの乗った馬の背に放る。それを確認して直ぐ様、リタは慣れない手綱捌きで馬を門へ向かい走らせ始める。その直ぐ後に続いてレイヴンも馬を走らせながら、迫り来る追っ手に矢を浴びせかける。

ルカは追っては来なかった。フレンと戦っていたその場に佇んだまま。去り際にレイヴンが見た表情、目だけで敵を射殺さんばかりの鋭い視線を向けるのではなくただただ不気味な笑みを浮かべ。まだ存分に敵意を剥き出しにされた方が良かった。おっそろしい御仁だわー、と呟きながら矢を放つ手は止めない。フレンには生きていれば再戦出来ると言ったものの、もう二度と出会わなくて済むよう切に願うのだった。

「ああ、もう！どうやったたら…えええいどきなさああい！何があつても今のあたしは止まれないわよ！」

フレンは生きた心地がしなかった。

とは言つても自分が何か出来る状態ではないだけに口出しができない。振り落とされないようしがみつくので精一杯だ。不慣れゆえに、強烈な手綱捌きを繰り広げるリタに初めは大人しく耐えていた馬も暴走気味である。元々鍛え抜かれていた馬だ。怒りに任せた疾走はそれは驚異的に速いもので後ろのレイヴンをどんどん引き離していくが、如何せん荒い。そしてリタもどう扱えばいいのか苦戦しているため、逃亡を止めようと前へ出てきた兵士たちは例外なく蹴り飛ばされるか踏み潰されていた。

広い皇都を駆け回り、ようやく眼前に出口である門が見えてくる。すると最後の手段とばかりに巨大な門の扉を兵士たちが閉じて行く。しかし馬は速度も緩めず足も止めなかった。そしてリタも、

「そんな扉、あたしの魔術の前では無意味よ！いっけえ！ファイアーボオオオル！」

躊躇なく発動したファイアーボールを門へ何弾もぶつける。兵士たちの頑張りも虚しく扉には音をたてて大きな風穴が開き、丁度追っ手を振り切ったレイヴンも追い付いたことで全ての逃亡者を堂々正面から外界へと解き放つこととなった。

しばらくは追っ手の危険性を考慮し、ひたすら休まず走り続けることにする。明る

かった空が暗く染まり、星が瞬き始めても。無我夢中で遠くへ遠くへと道を走り抜けた。

そして、フレンが自身の回復術により何とかリタの後ろに座って乗ることが出来るようになった頃。暗かった空からは僅かに光が溢れている。そろそろ夜が明けるのだろう。一行は、旅の者だととうとうと快く通してくれた関所を越え、そこから少し進んだところにある大木の下で休息をとっていた。

「…ま、ここいらまで来りゃ流石に大丈夫でしょ。こつからどうしますかね」

レイヴンの疲れを滲ませた声音に座り込んだ馬も同調したように、ブルブルと小さく鳴く。それにフレンが口を開く。

「この地に飛ばされてきているのは、レイヴンさんだけですか？」

「うんにゃ。ユーリの旦那も他の皆も来てるはずなんだけど。俺様は一人で気が付いたらあの馬小屋の屋根にいたから、他もバラバラに各地に飛ばされちゃってんのかもねえ…」

レイヴンは、リタとフレンを追いかけて訪れたあの祠で光に包まれた後次に気が付いたら例の馬小屋の上に寝そべっていたのだという。しかしどういことだと混乱する間もなく、下から大声がするので覗き見ればフレンが血だらけで叫んでいる姿が見えた。そこからは訳はわからないながらも、とりあえず本能的に逃げるべきだと感じたそ

の意識に従い行動を起こしたままで、事情はよくわかっていないのだと話した。

それを黙って聞き、ひとつ息を吐いた後フレンは深々と頭を下げる。

「すみません、ご迷惑を…。ありがとうございました。レイヴンさんが来て下さらなければ、どうなっていたか」

いいのよ、とレイヴンがそれにひらひらと軽く手を振る。すると今まで木に凭れ、疲れたようにぼんやりしていたリタが、ふんと小さく鼻を鳴らし顔をそっぽに向けたままで呟いた。

「ま、まあ…助かったのは事実だし、…あたしからも礼を言うわ。その、あ、あ、あり、がと」

迪々しい、彼女の精一杯のお礼である。レイヴンは肩を揺らし笑いながらリタの頭をぼんぼんと撫でた。

ここからの道のりは、近くの街で情報を集めながら、どこか腰を落ち着けて調べものができる場所に行きたいというリタの希望もあり、通りすがりの旅人の情報から資料も豊富にあるだろう学園都市であるグリーンヒルを目指すこととなった。そこを拠点とし、バラバラになった仲間たちの所在、帰るための方法、この世界についてなどを各々が調査することになる。

再び3人が腰を上げて、二頭の馬と共に歩き出したのはすでに日も高く上がりきった

頃だった。

ここに3つの明星が、想像もしない戦乱の入り口に足を踏み入れる。そして今、別の場所でも大きく星が動こうとしていた。

運命の火蓋

「リタ・モルディオを逃がした、ですって？」

高い位置で二つに結んだ色素の薄い水色の髪がゆらゆら揺れる。身長はそう高くもなく、体格は小柄な少女が、しかし態度は尊大に大きな椅子に足を組んで座り目の前で跪いて報告をする兵士に鋭く問いを投げ掛ける。

そうして深くため息をつく椅子から立ち上がり、資料を大量に重ねた机へと足を運ぶ。

「ルカ様も追わないなんて、気紛れにも程がありますわ。もうテルカ・リュミレースに人材を求めている時間はないですわね：今ある頭脳で進めていくしか」

一枚の設計図を手取る。形は仕上がってはいるものの、改良を加えながら大量に作成するとなれば自身と同じくらいの知識を持つ人材が欲しかったのだが、と少女は残念だと呟く。

しかしすぐにその表情を厳しいものにすると未だ跪いたままの兵士に命を下した。

「現段階の設計図での兵器の量産にすぐ取り掛かるよう研究者たちに伝えなさい。それ

と：リタ・モルディオの搜索もですわ。発見した場合は速やかにここへ連れてきなさい。おまけは不要、全て排除してから、モルディオのみ連れてくるんですよ」

慌てて頭を深く下げた兵士は立ち上がり敬礼をした後駆け足に部屋を出ていった。静かになった室内で、設計図を片手に少女は再び椅子に腰を落ち着ける。その表情は先ほどの厳しさを含ませたものから、口許にはうつつすら笑みを浮かべ、どこか優越感に浸っているかのようなものへと変わっていた。

「わたくしを捨てた帝国、テルカ・リユミレースという世界、：彼らに見えない場所ではあるけれど、ついにわたくしの研究の、理想の、素晴らしさを証明出来る時が来たのですわね：」

どこか恍惚としているかのようにも見える少女はふつと息を吐くと、また表情を厳しい研究者のそれへと変える。どこか気品の良さを漂わせてふわりと立ち上がると、他の研究者たちの集う部屋へと足を向けた。

× × × × ×

ハイランドの片隅にある静かな街、キャロ。その外れにある古びた道場へ、紙袋いっぱいには様々な野菜や果物を抱えたカロルがぱたと駆けていく。そうして今にも外

れてしまいそうな戸をバァンと開けると「ただいまー!」と元気に声をかけて中に入った。

「おう、カロル。ごころーさん」

台所へ立ちぐつぐつと音をたてる鍋の様子を見ていたユーリが応える。美味しそうな匂いに惹かれ、買ってきた食材をそれぞれの保管場所にしまうと、カロルも鍋の傍へと寄ってきた。

「今日はユーリがご飯作ってくれてるんだね、良かった! やった! …」

どこか安堵したような表情を浮かべて喜ぶカロルに、しかしユーリは間髪いれず無表情で返す。

「オレじゃねえよ。ナナミに鍋の様子見といってくれ、って頼まれたんだ」

途端、カロルの表情は凍りつき、ゆっくりとその場にへたり込む。そしてガバツとユーリの足へしがみつくと涙に震える声で必死に訴えかけた。

「ユーリお願いだよおおお! ユーリなら、味付けを常識的なものに変えることくらい朝飯前でしょ!?! ボクもうあんな…あんな…ご飯食べて全身痙攣なんてしたくないよおおお!!」

悲痛なカロルの叫びにユーリはどうしたもんかね、と溜め息をついた。

この道場の家主、ナナミは天真爛漫、笑顔のよく似合う少女である。元はゲンカクと

いう育ての親とリオウという血は繋がっていないらしい弟との三人暮らしだったらしいが、ゲンカクは他界し、リオウは今ハイランド軍のユニコーン隊という少年ばかりを集めた部隊に所属しており遠征中のため、しばらくナナミは一人暮らしなのだという。

ユーリとカロルはあの祠で光に包まれた後、次に目が覚めるとこの道場の裏手にある大木の下で倒れていた。その時、二人が目覚めるまで様子を看っていてくれたのがナナミだったのだ。流石に成人男性を担いでは歩けないと、その場で出来る限りの処置をしてくれた少女は、目を覚ました二人に行き場がないと知ると快く自身の住む道場へ来るようにと勧めてくれた。その言葉に甘え、ユーリとカロルは家事の手伝いをしながら街で日雇いの仕事を見つけてはそれをこなし路銀を稼ぎ、街の周辺を回って仲間たちの所在についての情報集めをするといった生活を早二週間程、繰り返していた。

ナナミには、ユーリたちがここへ来た経緯を話している。おそらく自分達は異世界の住人ということになるのだろうとも。少し驚いていたナナミだが、すぐに「異世界の人と友達になれて嬉しい」と笑顔を見せたのだ。そして、ユーリたちのために協力を惜しまないとも。どこかの馬の骨ともわからない人間を全面的に信頼し、受け入れ、友と呼び、力を尽くそうとする。そんなナナミに、大したものだ、とユーリは感心していた。そして、二人のナナミに対する信頼も大きなものになっていったのだった。

そんなナナミの致命的な欠点が、料理である。彼女の調理風景を初めて目にした日、

ユーリは親友であるフレンと味覚の似通った部分があるのだろうかと感じていたが、実際はその倍以上であった。

フレンはどちらかと言えば単に味覚が独特なため、いろいろな調味料を加え個性的な刺激を求める傾向にあるのみで、レシピを正確に用いれば素晴らしい料理を完成させられる。腕が悪いわけではないのだ。

しかしナナミにいたっては、腕は悪くないのだろうが、レシピを使用しても何故か失敗をしてしまう。また自由に作らせれば、味見をせず、これを入れれば美味しいかもしれないと、おおよそ食材として使用しないであろうものまでぶち込んでくることがある。そのため見た目から明らかに危ないものと、そうでない時の波が激しい。そして見た目が普通な時であろうと味の方はフレンよりよしく凄まじいため、全くもって油断ならぬのである。しかしナナミ自身は味覚は不可解で、手作りの料理も美味いと言って完食し、ユーリの作った普通の料理も美味いと言って完食する。フレンのように「もう少しパンチをきかせて」などと言ったふざけた注文が全く無いのだ。これは今まで相対したことのない部類の味音痴だと、ユーリもカロールも脳内で警報を鳴らしたものである。そして現在。足に縋りつくカロールを見やり、ゆっくり鍋の中身に目をやるユーリ。今回は、香り自体は良いものを見た目に關しては明らかに危ない部類のものだった。何の足だろうか、あまり見かけない生物の足がスープの中から突き出しており、加えて独特

な模様のキノコが大きく刻まれて入っている。煮込み始めてから時間も経っているため、よくエキスが染み出し始めているだろう。味を整えるためには現在の味付けを知らねばならない。つまり味見をしなければならぬのだが、ユーリにはその勇気がなかった。流石にこれをカロールに毒味させるのも可哀想である。しかしこのままでは今日の夕食はこれだ。今までユーリは、ナナミが料理当番の日だけは「仕事が長引いた」と嘘をついては散歩をして時間を潰していたのだ。しかしそれももう限界、ナナミが不審に思い始めている。彼女のいない間に作り替えてしまおうかとも思ったが、そうすれば気付いたナナミが激怒するだろうことは容易に想像がたった。

腕を組むユーリ、考えに考えて出した結論は。

「これ入れときや何とかなんだろ」

そう言ってひとつ、アイテムを取りだし躊躇いなく鍋へとその中身全てをバシヤツと乱雑に入れた。

カロールはそれを黙って見ていたが、アイテムが何なのか気付いた瞬間戸惑いの声をあげる。

「ライフボトル…えっ？ライフボトル？えっ？ユーリ今ライフボトル鍋に入れたの？」

「これで食っても生き返る。万事解決だろ。オレやっぱ、外出てくるわ。鍋のこと頼むぜカロール先生」

「えっ、ちよっ！ユ…」

言うが早いか、ユーリはカロルの返答も聞かずスタスタと素早く開け放たれたままだった戸口へと向かい、外に出ようと足を踏み出す。

ユーリに見捨てられた、とカロルは勢いをつけて絶叫しようとそちらに目を向けたが、しかし一步踏み出した状態で彼はそこから進もうとはしない。不審に思っていたのも束の間、その答えとしてよく通る少女の声が響いた。

「ユーリ！お鍋見といってっってお願ひしたのにサボったらだめでしょ！それにまた外出？だめだからね！今日という今日は絶っつつ対にだめ！お姉ちゃん許さないんだから!!」
お姉ちゃん、と言っつてはいるが実際ユーリの方がだいぶ年上である。

戸口の先で待ち構えていたのは、ナナミであった。腰に手を当て目を光らせる姿は、年相応可愛らしい少女のそれではあるものの、どこか背筋を凍らせるほどの気を滲ませてもいた。

結局ユーリはその日外に出ることは叶わず、ナナミの強烈な手料理をカロルと一緒に食し、ライフボトルの効果で戦闘不能は免れたものの原因不明な手足の痺れと一晩中格闘することとなったのだった。

闇に上がる火の手。虚しくも転がる少年たちの身体。そのどれもがすでに冷たく微動だにしない、しかし先程まで笑い合っていたユニコーン隊の友たちで。

休戦協定を破った都市同盟が攻めてきた、そう言った隊長の言葉を信じていたがしかしそれは部下である自分達を欺くための嘘だった。

真実は、血に濡れた剣を握る自国の兵士たち、そして不気味な笑みを浮かべ友たちの屍を見下ろすハイランドの皇子の姿にあった。

国が僕らを裏切った。

「もし僕らが生き延びて、でも離ればなれになってしまったら……。その時は、ここに戻ってくることにしよう。そして……。ここで再会しよう。約束だ、リオウ」

亜麻色の長髪をひとつに結わえ、風に揺らした少年が腰から短剣を抜き近くの岩壁に傷をつける。

それをじつと見ていた、リオウと呼ばれた頭に金の輪をはめた少年が小さく頷いて前に進み出る。

「わかった」

そう短く応えて、彼もまた短剣を抜き、先に付けられた傷に交差するようにそこへ痕

をつけた。

背後から二人の少年を亡き者にせんとガチャガチャと鎧の音を立てながら自国の兵士たちが近づく。

二人には待っている人がいる。帰らねばならない理由があつた。ここで散るわけにはいかなかった。

並んで崖の上に立つ。だから、逃げ場はもうここしかなかったのだ。

「いくぞ、リオウ！」

「うん！」

二人は急流へとその身を投げ出した。剣を手に兵士たちが駆けつけた時には、もう誰の姿もそこには残っていないかつた。

こうして星は動いていく。混沌とした戦乱の中へ、その光を歪ませていきながら。